

暗黙の人格観検査 (IU&IPU式) の改訂と実用化の試み (4)

An attempt at revision of the Implicit Personality Theory Test (IU & IPU version)

with the aim at practical use (4)

弘前大学保健管理センター

田名場 美 雪

弘前大学教育学部附属実践総合センター

田名場 忍

個々人の暗黙の人格観を抽出するために開発された心理検査である「暗黙の人格観検査」の実用性・臨床効果を検討した。ふたつの事例を取り上げ、因子の解釈および因子得点布置を、被検査者自身による内省を参考に検討した。その結果、それぞれに固有な対人認知構造が明らかになるとともに、本検査の有効性が示唆された。

-
- 1 問題
 - 2 方法
 - 3 事例紹介
 - 4 考察
-

キーワード：暗黙の人格観検査，対人認知，パーソナリティ

1 問題

私たちは一般に、自らの過去経験を土台としたパーソナリティについての素朴な信念体系をもっており、これをもとに様々な情報処理を行い、自他のパーソナリティの全体像を形成すると言われている。このような素朴な信念体系は暗黙の人格観 (implicit personality theory) と名付けられている (Cronbach, 1955¹⁾)。つまり、現実生活場面で、我々が自他のパーソナリティを認知する場合、対象人物のリアルな特性そのものを正確に反映させているというよりも、むしろ、個々人が自分なりの認知カテゴリー (すなわち、暗黙の人格観) を保持し、これに基づいて自他のパーソナリティを理解していることになる。このような考え方のもと、パーソナリティ認知構造の多次元的検討が行われてきた。その結果、暗黙の人格観は、個人差が大きいこと、対人行動や対人関係に影響を与えることが指摘されてきた。しかしながら、臨床場面や日常生活での応用的・具体的検討はこれまで十分なされてきたとはいえない。本研究は、こうした背景をふまえ、個々人の暗黙の人格観を抽出するために開発された心理検査 (以下「暗黙の人格観検査」) の実用性・臨床効果を検討することを目的とする。

本検査のオリジナルは、1994年の「岩手大学式人格観検査：もっと自分を知るために・もっとまわりの人を知るために」であり、その後改訂が重ねられてきた (細江ら1995²⁾, 2000³⁾)。この時点では検査用紙を使用していたが、現在ではオンライン上での検査施行が可能となり、本格的な使用を目的に改訂を重ねている段階である (田名場, 2001⁴⁾; 田名場ら, 2002⁵⁾; 田名場ら2002⁶⁾)。

2 方法

暗黙の人格観検査は、被検査者が検査を作成していくという独創的な手法をとる。実施手続きは、被検査者が日常的に使用している他者や自分の性格を表す言葉を14個 (個別特性語)、自由記述により提出するところから開始する。

さらに、あらかじめ設定した基準となる形容詞6個（共通特性語）を加えた計20個の性格特性語で、身近な他者19名と自分自身および理想の自分について5段階評定を行う。この共通特性語について説明する。林（1978）⁷⁾によると、パーソナリティ認知構造を構成する基本的な次元には「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力本性」の3つを設定できるとしている。この基本3次元は、20項目からなる尺度評定から得られ、従来の研究（林ら、1983⁸⁾；大橋、1984⁹⁾；田名場、1993¹⁰⁾；廣岡、1997¹¹⁾）で安定的に抽出されてきている。この3つの次元に高い因子負荷量を示す形容詞を本検査では使用している。しかし、この尺度は作成後20年以上経過しており、我々の使用することばあるいはその意味が変化してきている可能性も指摘されており（田名場、2002¹²⁾）、この尺度の使用および基本3次元の解釈については慎重である必要がある。なお、本検査では基本3次元ではなく一般的3要因と記述する。

分析は、自由記述により提出された14個の性格特性語を変数、被評定人物21名をサンプルとして因子分析（主因子法、非反復解法、バリマックス回転、固有値の打ち切り基準 $E \geq 1.0$ ）を施し因子を抽出した。さらに各因子について基準（一般的3要因）との相関を算出した。この手法により、個人に即した対人認知構造の適切な抽出のみならず、ある程度の他者比較が可能となっている。

3 事例紹介

4つの因子が抽出された2つの事例を紹介する。被検査者自身による解釈が巧みであるのみならず、内省の深まりが認められた事例1、因子の解釈は十分だったがユニークな自己観であったため内省に至るには困難だった事例2である。

(1) 事例1

因子の解釈

因子1に高い因子負荷量を示した項目は、値の高い順に「⑥おもしろい (0.880)」、 「⑬人に気を使わせない (0.706)」、 「⑦やさしい (0.657)」であった（表1参照）。「おもしろい人は人に気を使わせず、やさしい」とみなす傾向があることを示している。さらに、一般的3要因のうちの「親しみやすさ」に中程度の正の相関 ($r=0.567$) を示していることから（表2参照）、この因子1が「個人的親しみやすさ」に関連があることがわかる。おそらく、人に気を使わせない、やさしいという特徴の人物に親しみやすさを感じるということである。この因子1の命名であるが、被検査者の解釈によると「とっつきやすさ」となっている。この因子1が「親しみやすさ」と相関を示したことからこの解釈は妥当なものと言える。したがって、「とっつきやすさ」因子と解釈できよう。

因子2に高い因子負荷量を示した項目は、値の高い順に、「⑩基本的なところがしっかりしている (0.902)」、 「⑭何事にも勤勉だ (0.776)」、 「②人の気持ちを良く考えている (0.614)」であった。「基本的な所がしっかりしている人は、何事にも勤勉であり、人の気持ちを良く考えている」とみなす傾向があることを示している。一般的3要因のひとつ「社会的望ましさ」に中程度の正の相関 ($r=0.612$) を示していることから、そのような人を社会的に望ましいとみなすようである。被検査者はこの因子2を「気持ちのまっすぐさ」因子と命名している。因子の内容、一般的3要因との相関から、適切な解釈と言える。

因子3に高い因子負荷量を示した項目は、絶対値の高い順に、「④芯がしっかりしている (-0.870)」、 「⑧行動力がある (-0.700)」、 「⑪嫌な事ははっきり断れる (-0.620)」であった。「芯がしっかりしていない人は行動力に欠け、嫌な事もはっきり断れない」とみなす傾向を示している。一般的3要因のひとつ「活動性」に中程度の負の相関 ($r=-0.643$) を示すことから、そのような人には活動性を感じないということである。因子3の命名であるが、被検査者は「精神的弱さ」と解釈している。因子の内容、

一般的3要因との相関から、適切な解釈と言える。

因子4に高い因子負荷量を示した項目は、絶対値の高い順に、「③よく気がつく (0.766)」、「⑨頼りになる (0.699)」、「⑫場の雰囲気を読みとれる (0.668)」、「⑥大人だ (0.556)」であった。「よく気がつく人は頼りになり、場の雰囲気をよみとれて、大人である」とみなす傾向があることを示している。因子4の命名であるが、被検査者は「リーダーの素質」因子と解釈していることから、このような特徴からリーダーシップをイメージしたと推測できる。

ここで、因子2に高い負荷量を示した項目「⑩基本的なところがしっかりしている」、因子3に高い負荷量を示した項目「④芯がしっかりしている」について検討する。一見したところ、辞書的には非常に近似した2つのことばであるが、被検査者はこのふたつのことばを異なる意味空間で使用している。「基本的なところがしっかりしている」場合は社会的望ましさ、「芯がしっかりしている」場合は活動性に関連している。このような個人に特有な性格特性語の使用法、および認知構造は、被検査者本人の内省をもとに了解できることはもちろんであるが、一般的3要因との相関をみることによっても明らかになる。

表1 事例1における因子負荷量

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
⑥おもしろい	0.880	0.051	-0.278	-0.012	0.855
⑬人に気を使わせない	0.706	0.258	0.110	0.178	0.609
⑦やさしい	0.657	0.065	0.307	0.190	0.566
⑩基本的なところがしっかりしている	0.207	0.902	-0.057	0.005	0.860
⑭何事にも勤勉だ	-0.092	0.776	-0.164	-0.058	0.642
②人の気持ちをよく考えている	0.325	0.614	0.019	0.204	0.250
④芯がしっかりしている	0.330	0.057	-0.870	0.096	0.880
⑧行動力のある	-0.094	-0.112	-0.700	0.226	0.563
⑪嫌なことははっきり断れる	-0.133	0.164	-0.620	-0.076	0.435
③よく気がつく	-0.163	-0.290	-0.137	0.766	0.717
⑨頼りになる	0.420	0.136	-0.193	0.699	0.721
⑫場の雰囲気を読みとれる	0.181	0.227	0.214	0.668	0.577
⑤大人だ	0.453	0.233	-0.430	0.556	0.755
①いい人	0.288	0.384	-0.108	-0.064	0.246
因子寄与率	18.038	16.201	15.34	14.412	

表2 事例1における因子と一般的3要因との相関

	要因1 「親しみやすさ」	要因2 「社会的望ましさ」	要因3 「活動性」
因子1「とっつきやすさ」	0.567***	-0.016	-0.147
因子2「気持ちのまっすぐさ」	0.231	0.612***	-0.218
因子3「精神的弱さ」	-0.009	-0.143	-0.643***
因子4「リーダー性」	0.027	0.391*	0.199

p < 0.1 (*), p < 0.05 (**), p < 0.01 (***), p < 0.001 (****)

因子得点布置図の特徴

「私」「理想の私」の位置づけを手がかりにみていく(図1, 図2参照)。因子得点の布置にはいくつ

か特徴がある。

一つ目の特徴は、「私」と「理想の私」が、原点对称に位置することである。

因子1：「私」はとっつきにくい。「理想の私」はとっつきやすい。

因子2：「私」も「理想の私」も気持ちのまっすぐさでは同程度。

因子3：評定人物21人の中で「私」は精神的に最も弱い。「理想の私」は21人の中の位置づけではニュートラルである。

因子4：「私」はリーダー性に欠けており、「理想の私」にはリーダー性がある。

現在の自分とは反対の性格に憧れをもっている、あるいは自己イメージの低下の可能性があると推測される。

二つ目の特徴は、「理想の私」と人物12がすべての因子において重ね合わされているという点である。理想に近い人物が偶然身近にいる、あるいは日頃から人物12を理想の人物とみなしているという可能性がある。被検査者の内省によると、この人物12には非常に好意をもっているだけでなく憧れの対象である。しかし、被検査者自身もすべてにおいて理想の私と重なるとまでは思っていなかったようである。

三つ目の特徴は、「私」と人物5が、すべての因子において重ね合わされている点である。被検査者は自分自身と人物5を似ているとみなしているのである。被検査者の内省によると、「人物5には不完全であるが人間味のあるあたたかさを感じている。被検査者は今の自分に決して満足はしておらず、理想を高くもっている。しかし、そのことは自己嫌悪とは異なる感情だということに気がついた。「人物5と自分が似ていると考え、ポジティブな気持ちになれる。現在の自分のすべてを変えていくのではなく、自分を肯定しながら理想に近づく事が重要である」と、この検査結果を内省する事により初めて気づく事ができたと言える。

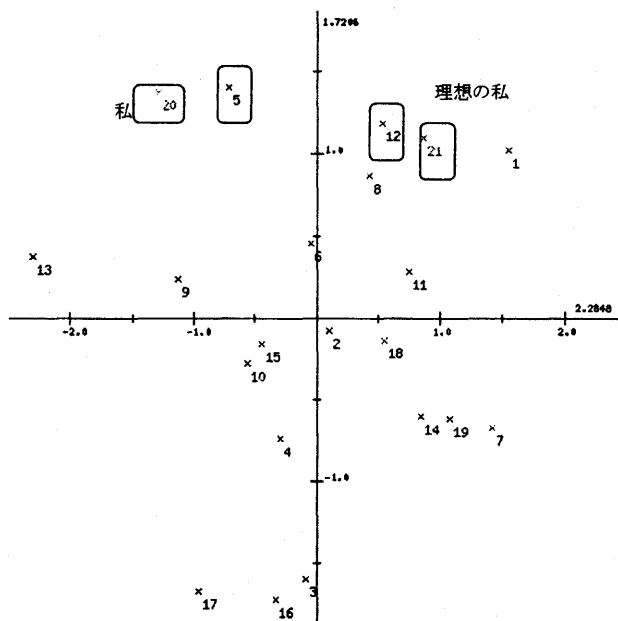


図1 事例1における因子得点布置1

(因子1「とっつきやすさ」×因子2「気持ちのまっすぐさ」)

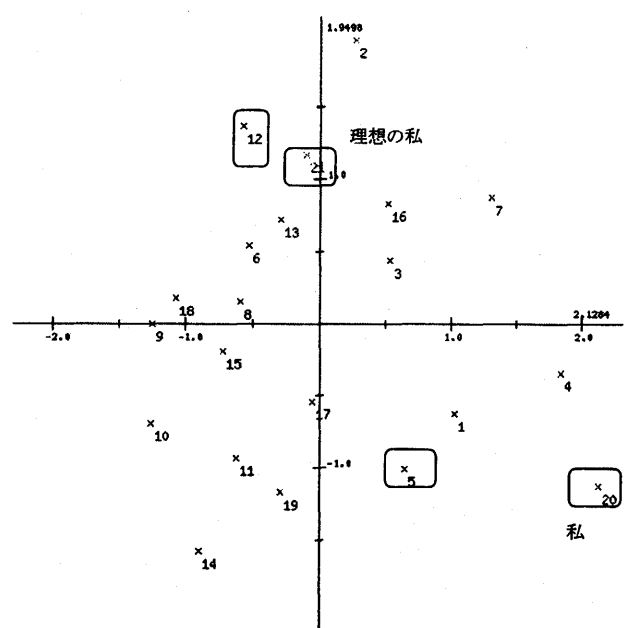


図2 事例1における因子得点布置2

(因子3「精神的弱さ」×因子4「リーダー性」)

(2) 事例 2

因子の解釈

因子 1 に高い因子負荷量を示した項目は、値の高い順に、「①優しい (0.964)」、「②親切 (0.954)」、「⑥気配りする (0.669)」であった (表 3 参照)。「優しい人は親切で気配りする」とみなす傾向があることを示している。一般的 3 要因との相関はみられなかった。被検査者は「配慮」因子と解釈したが、因子負荷量の高い項目を優先して、「優しさ」因子の方が適切であろう。これら性格特性語の辞書的な意味から考えると、因子 1 は「社会的望ましさ」と相関を示すことが期待されるが、実際には相関はみられなかった (表 4 参照)。このことから、被検査者にユニークな観点であることが予測される。

因子 2 に高い因子負荷量を示した項目は、絶対値の高い順に、「⑤明るい (0.770)」、「⑫礼儀正しい (0.774)」、「③むかつく (-0.670)」、「⑧感じ悪い (-0.759)」であった。「明るい人は礼儀正しく、むかつかなく感じが悪くない」とみなす傾向を示している。一般的 3 要因のうちふたつに相関を示した。「親しみやすさ」に強い正の相関 ($r=0.747$)、「社会的望ましさ」に中程度の正の相関 ($r=0.433$) を示すことから、そのような人に親しみやすさと社会的望ましさを感じるようである。因子の解釈であるが、被検査者は「感じよさ」と命名した。因子の表す内容からも妥当な解釈と言える。

因子 3 に高い因子負荷量を示した項目は、絶対値の高い順に、「④いいかげん (0.906)」、「⑪ちゃらんぼらん (0.880)」、「⑩堅苦しい (-0.676)」であった。「いいかげんな人はちゃらんぼらんで、堅苦しくない」とみなす傾向を示している。一般的 3 要因のひとつ「社会的望ましさ」に中程度の負の相関 ($r=-0.533$) を示すことから、そのような人を社会的望ましさ欠缺者とみなしているということである。「いいかげん」因子と解釈できる。

因子 4 に高い因子負荷量を示した項目は、順に、「⑦わかりやすい (0.661)」、「⑨面白い (0.594)」、「⑬むらのある (-0.560)」であった。「わかりやすい人は面白く、むらがない」とみなす傾向を示している。一般的 3 要因とは相関を示さなかった。「わかりやすさ」因子と解釈できる。

表 3 事例 2 における因子負荷量

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
①やさしい	0.964	0.149	-0.104	-0.019	0.963
②親切	0.954	0.160	0.108	-0.004	0.948
⑥気配りする	0.669	0.205	0.070	-0.196	0.534
⑤明るい	0.070	0.770	0.134	0.374	0.756
⑫礼儀正しい	0.158	0.744	-0.253	-0.128	0.660
③むかつく	-0.265	-0.670	0.011	0.060	0.524
⑧感じ悪い	-0.181	-0.759	-0.116	-0.236	0.679
④いいかげん	0.179	0.025	0.906	-0.010	0.854
⑪ちゃらんぼらん	0.159	-0.150	0.880	0.060	0.826
⑩堅苦しい	0.096	-0.270	-0.676	-0.206	0.583
⑦わかりやすい	-0.058	-0.073	0.286	0.661	0.529
⑨面白い	0.001	0.184	-0.015	0.594	0.387
⑬むらのある	0.091	-0.146	0.076	0.560	0.350
⑭図太い	-0.166	-0.092	0.181	0.085	0.076
因子寄与率	18.062	17.371	16.421	10.110	

表4 事例2における因子と一般的3要因との相関

	要因1 「親しみやすさ」	要因2 「社会的望ましさ」	要因3 「活動性」
因子1「配慮」	0.252	-0.114	-0.076
因子2「感じ良さ」	0.747***	0.433***	0.015
因子3「いいかげん」	0.325	-0.533	0.122
因子4「わかりやすさ」	0.170	-0.118	0.291

p < 0.1 (*), p < 0.05 (**), p < 0.01 (***), p < 0.001 (****)

因子得点布置の特徴

大きな特徴は、「私」と「理想の私」が全ての因子において、原点对称に位置している点である（図3, 図4参照）。

因子1：「私」は優しく、「理想の私」は優しくない

因子2：「私」は感じがよく、「理想の私」は感じがよくない

因子3：「私」はいいかげんで、「理想の私」はいいかげんでない

因子4：「私」はわかりにくく、「理想の私」はわかりやすい

事例2では自分自身を「優しく、感じがよく、いいかげんでわかりにくい」とみなしている。そして「理想の私」にその反対を求めている。つまり、「優しくなく、感じがよくなく、しかしいいかげんではなく、わかりやすい」という特徴である。因子1と因子2に関しては、我々の多くに共通して見いだされるであろう人格観とは異なるように思える。

ここで、事例2にとっての因子1と因子2の意味を考えてみる。自分自身は優しく、感じがよいが、「優しくなく、感じがよくない」というのが理想であるとみなしている。一般的なイメージとは正反対に思える内容である。優しく感じのよい人間であることに満足していない、あるいはそのような人間であることに苦痛を感じていることが仮説として考えられる。因子1「優しさ」が社会的望ましさに決ってつながってはいないことからそれはうかがえる。残念ながら、被検査者自身による内省では、この点にまだ気がついていない。独力で内省に至るのは難しい内容である。

本人にとっての「優しさ」とはいったいどのような意味をもっているのだろうか、それが毎日の生活にどのような負荷をかけているのだろうか、専門家と共に結果を整理することにより、内省が深まり、日常生活を豊かにするきっかけが得られることが予測される事例である。

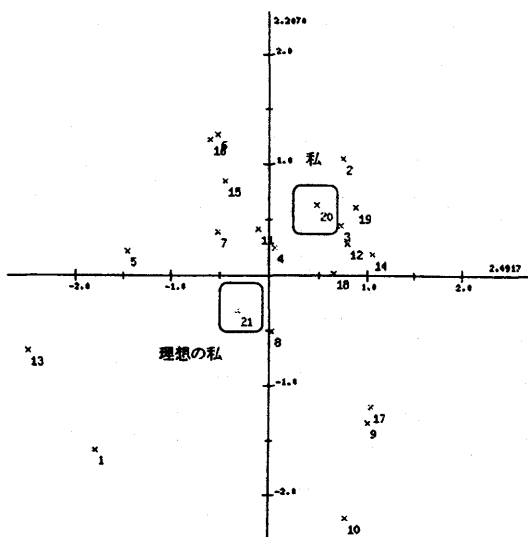


図3 事例2における因子得点布置1
(因子1「優しさ」×因子2「感じよさ」)

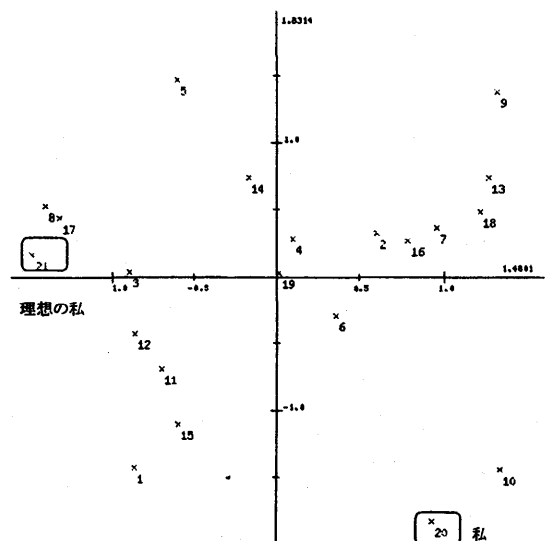


図4 事例2における因子得点布置2
(因子3「いいかげん」×因子4「わかりやすさ」)

4 考 察

被検査者自身が結果解釈を行うという本検査の特徴は、暗黙の人格観の自覚や新たな人格観への展開、対人関係の確認、ひいては対人行動・対人関係の改善の機会を提供する。被検査者が自らの暗黙の人格観を知ることによるメリットにはさまざまなものがある。漠然としていた他者に対する印象を確固としたものにするかもしれない。そのことで、他者と接する際の確固とした対応に、あるいは柔軟に展開することにつながる可能性もある。また、狭い範囲でしか自分や他者を理解していなかったことに気づくかもしれない。他者のあるいは自らのこれまでとは異なる側面を把握するきっかけとなろう。さらに、自分や理想の自分に近い他者を知ることによって、他者との関係が自分自身の支えになっていたことを実感し、その他者との関係を促進していこうという確信を強くすることにつながる場合もある。

こうした理解や気づきや実感、すなわち内省は、被検査者の独力によりある程度は可能だが、データ分析に専門的な統計解析を使用している点で、人間関係諸科学の専門家と被検査者による分析の共同作業は、実りある内省に至る実質的な有効な手段となるだろう。

また、暗黙の人格観検査による内省は、必ずしも直接的なメリットばかりではない。これまでとは異なる暗黙の人格観を築いていく過程には、これまでの自分自身への後悔や自己批判等の苦しさが伴う場合が多い。さらに、その過程において、暗黙の人格観のみにとどまらず、自分自身や対人関係上の深刻な悩みに思いが及ぶこともある。このようなとき、被検査者は、辛い思いや不快な感情から目をそらしたり、隠そうともするが、それは暗黙の人格観への深い内省の障害となる。その際、カウンセリングの専門家が、被検査者の悩みや辛さを共有し、支えることにより、被検査者は自分自身の暗黙の人格観を受け止めようとし始めるのであり、そこから新たな人格観の形成や対人関係上の対応が生まれてくるのである。暗黙の人格観検査は、アセスメントのみを目的とした心理検査ではない。検査結果から被検査者の深い内省を導くことが重要な心理検査であると考えられる。

引 用 文 献

- 1) Cronbach, L.J. 1955 Processes affecting scores on "understanding others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- 2) 細江達郎・田名場美雪・田名場忍 1995 暗黙のパーソナリティ論による人格観検査 (IPT) の制作 日本心理学会第59回大会 76
- 3) 細江達郎・細越久美子 2000 暗黙の人格観検査 (IU&IPU 式) の改定と実用化の試み 日本応用心理学会第67回大会発表論文集 23
- 4) 田名場忍 2001 暗黙のパーソナリティ論による人格観検査の検討 (1) 特性語の提出傾向について 日本応用心理学会第68回大会論文集 96
- 5) 田名場忍, 細江達郎, 細越久美子, 田名場美雪 2002 暗黙の人格観検査 (IU&IPU 式) の改訂と実用化の試み —オンライン化の検討— 日本応用心理学会第69回大会発表論文集 123
- 6) 田名場美雪・細江達郎・細越久美子・田名場忍 2002 暗黙の人格観検査 (IU&IPU 式) の改訂と実用化の試み —共通尺度の検討— 日本応用心理学会第69回大会発表論文集 124
- 7) 林文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 233-247.
- 8) 林文俊・大橋正夫・廣岡秀一 1983 暗黙裡の性格観に関する研究 (I), 実験社会心理学研究, 19, p9-25
- 9) 大橋正夫 1984 「対人関係の社会心理学」 福村出版.
- 10) 田名場美雪 1993 「暗黙のパーソナリティ論」に関する研究 —「暗黙のパーソナリティ論」の臨床への応用可能性をめぐって—, 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, 1, 165-183
- 11) 廣岡秀一・山中一英 1997 対人認知次元の構造的変化に関する縦断的研究, 実験社会心理学研究, 37, 37-49.
- 12) 田名場忍 2002 人格観検査の理論的検討と展望, 富士大学紀要, 62, 79-90